

レバノン共和国ティール市郊外ブルジュ・アル・シャマリ所在 T.01 遺跡 H2 掘込石棺墓の調査

西山 要一*

The Excavation of Rock Cut Grave H2 at Bluj al Shamali T.01 Site, Tyr, Lebanon

Yoichi NISHIYAMA*

Abstract

We are executing the conservation project of the Bulj al Shamali T.01 Site from 2009 at Tyre in Lebanon.

In this project, we find an unrobed rock cut grave (r.c.g.H2). R.c.g.H2 is a simple coffin on the ground. And we find 1 ceramic mask of God Pan, 260 small nonstandard glasses beads, 2 large global glasses beads, 1 bronze Tyrian coin, 2 shells, 1 unknown bronze good and 1 block seeds in r.c.g.H2.

God Pan is the genius of shepherd and Tyrian coin was made in late 1c.AD. And nonstandard glasses were spilled on making glassware.

We can clear the style of funeral ceremony, and that the buried person was shepherd and burial time was in 2 c. AD.

Moreover, we clear that the relation between rock cut grave and underground tomb with wall paintings, and the relation between Bruj al Shamali's community of outskirts and Tyrian community of city by degrees.

1 はじめに

レバノン共和国の首都・ベイルートの南約 80 km にあるティール市には、世界文化遺産「フェニキアの中心都市として栄えた港町ティール」が所在する。フェニキア時代の遺構は未解明であるが、ローマ時代の列柱道路・公共浴場・水道橋・港湾施設・ヒッポドロムス（戦車競技場）・記念門・ネクロポリス（墓地）などの遺構が発掘・修復・整備され、古代都市ティールの威容を誇っている（Jidejian, N.: 1966, Ali Badawi: 2010）。

ティール世界遺産地区の東約 2 km の丘陵裾にもローマ時代からビザンチン時代の地下墓・掘込墓が多数営まれている。その一角のラマリ地区では2002年度より、泉拓良奈良大学教授（現京都大学大学院教授）を代表者とする考古学調査隊がローマ時代の地下墓・掘込墓を発掘し、アンホラ・ランプ・ガラス瓶・テラコッタ神像・分銅・マスク・鉛製呪詛板などを発見している（泉拓良：2004, 泉拓良・西山要一・辻村純代・宮坂朋：2004, Izumi Takura and Tsujimura Sumiyo: 2010）。

また、同地区では2004年度より西山要一を代表者とする奈良大学チームによる壁画地下墓 TJ04 の保存修復研究を開始、2007年度に修復を完了した。このプロジェクトは半ば崩壊している墓室の修復、壁画クリーニング・剥落止め・強化とともに、壁画顔料の組成分析や温湿度・紫外線強度・大気汚染などの保存環境調査を行った。

その結果古代ローマ時代の壁画が良好な状態で残されているのは、墓室内の温度・湿度が極めて安定している

* 奈良大学

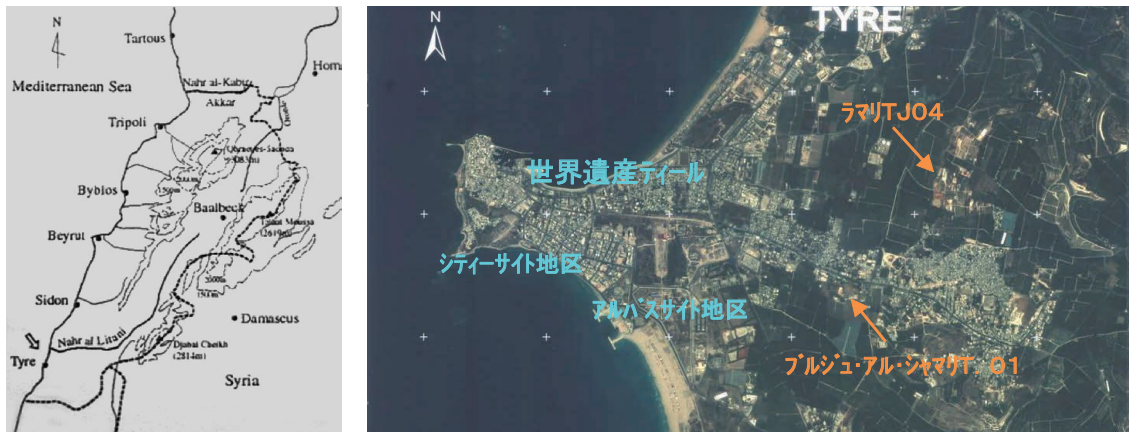


図1 遺跡位置図

ことが要因であることを明らかにし、将来の TJ04 の保存環境確保の貴重なデータとすることができた（西山要一：2006, 2007a, 2007b, 2008a, 2008b）。

2009年度に着手したブルジュ・アル・シャマリ地区所在の T. 01 遺跡は、北に民家が隣接し、草が生い茂り、瓦礫の捨て場となっていた。壁画地下墓 T. 01-I は既に開口していて墓室床には岩盤掘込石棺の蓋石や破壊された土器が散乱、天井は崩落してコンクリート蓋がかけられ、四壁の壁画は 1/5 ほどが剥落している状況であった。とはいえ、鮮やかに彩色された孔雀・鳥・魚・パン・壺・星などの壁画とギリシャ語の碑文はこの遺跡の価値と保存の必要性を十二分に示している。

2009～2011年度の調査の結果、地下墓 T. 01-I は横長の平面プランの墓室床に 6 基の岩盤掘込石棺、甕を据える坑、供物台を設け、床はモザイク、壁と天井は壁画で飾るなど遺構の構造や規模、特色を明らかにした。また墓室内からは多数の壺と甕・ランプ・ガラス瓶・人骨・壁画・モザイク等の破片が出土し、さらに床の土砂を除去し現れたモザイク床には“B K T”の文字が記され、T. 01-I 地下墓の築造年がティール暦322年すなわち西暦紀元196/197年であることを明らかにするとともに、壁面の碑文と肖像画から“リュースス”なる人物のために築造された墓であることも明らかにした。それとともに、壁画のクリーニング、剥落止め、強化と温度・湿度・照度・紫外線強度・大気汚染濃度などの保存環境調査、出土人骨の形質人類学による鑑定と放射性炭素 C 14年代測定、地下墓室内の微生物調査、遺構の三次元測量などを行った（西山要一：2009, 2010a, 2010b, 2011a, 2011b, 2012）。

T. 01遺跡の遺構は地下墓 T. 01-I のほか、地下墓 T. 01-II、地上部の 5 基の岩盤掘込石棺墓、東西 2 か所の石切り遺構を発見しているが、本稿では、地上部に構築されていた 5 基の岩盤掘込石棺墓について、奇跡的に唯一未開封であった H2 掘込石棺墓の調査とその成果について述べる。

2 ブルジュ・アル・シャマリ T. 01 遺跡と岩盤掘込石棺墓の概要

ブルジュ・アル・シャマリ T. 01 遺跡はティール市郊外のブルジュ・アル・シャマリ地区の東西に伸びる石灰岩を岩盤とする丘陵の南斜面に位置している。調査地の北と西には民家が隣接し、東にも道路を挟んで民家が建設され、南方のみが建物はなく浅い谷に向かって下る農地となっている。北東 50 m ほどの民家の傍らには、工事

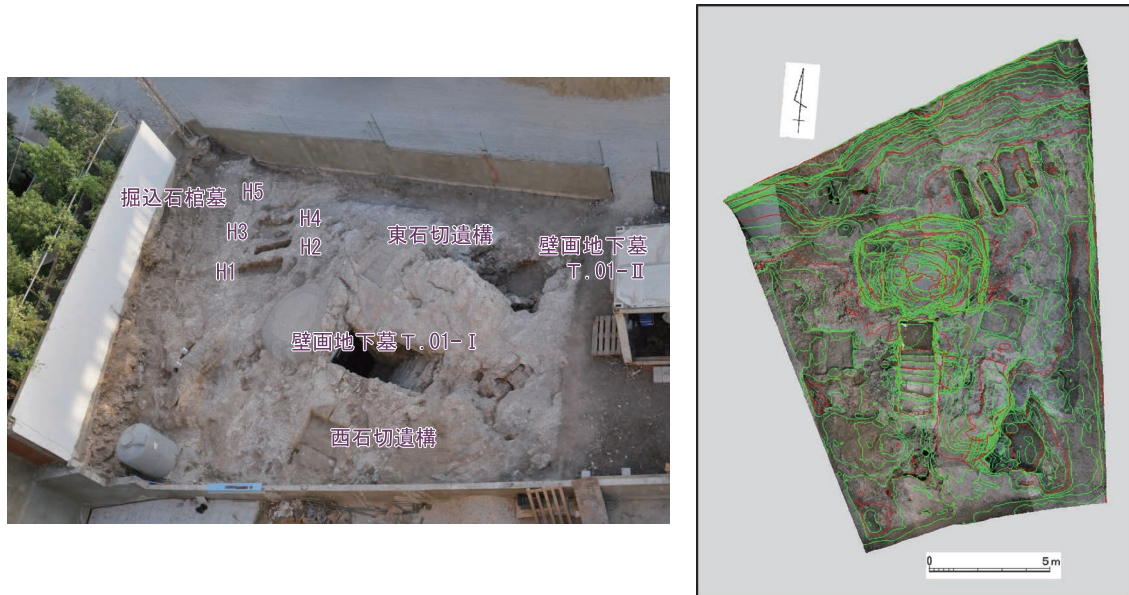


図2 T. 01 遺跡の遺構

中に出土したものか石棺の破片が積み上げられていて、T. 01 遺跡とその周辺は地下墓や岩盤掘込石棺墓の密集する墓域であった可能性が高い。

T. 01 遺跡の調査区の中心には、孔雀文壁画のある地下墓 T. 01-I，その南東に接するようにして地下墓 T. 01-II，T. 01-I の階段の東西地表部に石切遺構 2 か所，T. 01-I の北東に隣接する地表部に岩盤掘込石棺墓 5 基が存在する。そのうち地下墓 T. 01-II は2011年度調査で新たに存在が明らかになったが，現在は階段下部と墓室入口を確認しているのみで構造は明らかではない。

岩盤掘込石棺墓群は主軸を北北西にして並列する 5 基の石棺（H1～H5）からなる。石灰岩の岩盤を掘削して棺形をくりぬき，板石で蓋をする簡素な石棺である。石棺は長さ 2.1～1.4 m，幅 0.5 m，深さ 0.65～0.40 m を計り，側壁をそれぞれ共有し，北側小口は頭部側であること示すように丸みを帯びて造られている。西から 2 基目（H2）のみが奇跡的に盗掘を免れ原状を保っている。

3 岩盤掘込石棺墓 H2 の遺構

地下墓 T. 01-I の北東地表部に接して2009年に確認していた未開封の掘込石棺 H2 の調査を2010年に行った。東西に並列する 5 基の石棺（H1～H5）のうち西から 2 基目の H2 のみが奇跡的に盗掘を免れていた。

掘込石棺 H2 は石灰岩岩盤を長さ 180 cm，幅 60 cm，深さ 50 cm に掘削し，東側に 3 枚，西側に 2 枚の板石を添えて南小口の内幅を 35 cm，北小口の内幅を 45 cm に整え，岩盤面よりおよそ 15 cm 低い両側板石上に 6 枚の蓋石を架けている。南側小口面は垂直・平面に岩盤を掘削しているが，北側小口面は岩盤を 15 cm ほどの浅い椀型に掘り込んでいる。これらの石棺の形状の特徴からは，被葬者は北を頭部，南を足部にして納棺されたことが推測される。

蓋石を慎重に取り外し蓋石の隙間から流れ込んだと思われるうす茶色の細かく柔らかい土を除去していったところ，深さ 10～20 cm 付近に達したところで石棺南半部 75 cm ほどが不整形の11個の石で覆われているのを確認



図3 掘込石棺墓（南から撮影 左より右へ H1～H5）



図4 掘込石棺 H2（南から撮影 左：蓋石除去前 中：石棺内南半部の覆石 右：床面検出後）

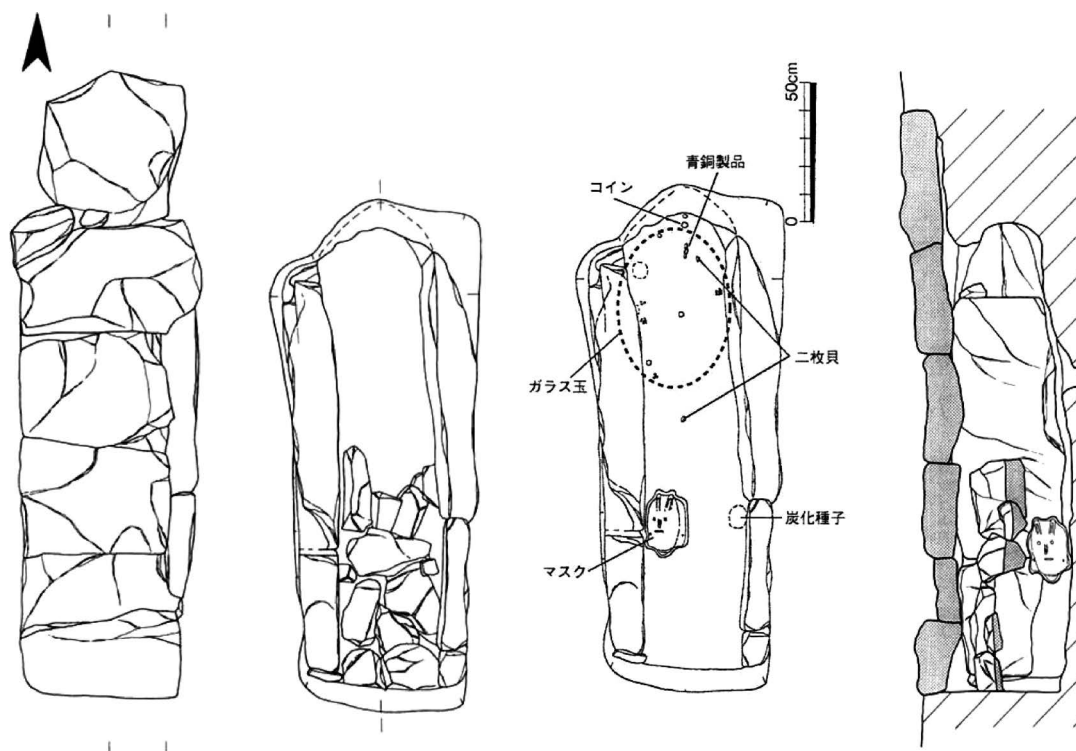


図5 掘込石棺墓 H2（左から 蓋石除去前 石棺内南半部の覆石 遺物出土状況 断面）

した。それらの石材は石棺床面からは浮いた状態にある。

これら石棺南半に詰められた石を除去し、さらに発掘を進めたところ、西側石に斜めに立てかけられるように裏返しの陶製マスク1点を発見した。さらに石棺床面の西側面石の際から大きいガラス玉2点、石棺北側60cmの範囲から不定形の大小のガラス玉が260点、北小口付近から“TYR”銘のあるブロンズコイン1点、西側石北端近くから既に錆のみとなった形状不明の銅製品1点、石棺中軸線上の北端近くに鉄製品の破片、中軸線上の北端近くとほぼ中央に立て置いた状態の二枚貝の片方の貝殻を2か所にあわせて2点、南から約60cmの東側石に沿って密集状態の炭化種子をそれぞれ発見した。

これらの遺物の位置から埋葬法を想像するならば、以下のようになる。

石灰岩岩盤を掘込んで石棺の概形を造り、東西両側壁に板石を添えて石棺の形を整えた後、床に土を敷き詰めて平坦に整える。石棺の中軸線上に北からコイン、鉄製品、垂直に立てた貝殻、そして、中軸線上中央にやはり垂直に立てた貝殻を置き、西側壁際には大きなガラス玉を置く。これらは地の神への捧げものであろうか。

そして石棺内に頭部を北に足部を南に遺体を納めた後、上半身には不定形の大小のガラス玉260個を散布し、右膝あたりと西側石の間に陶製マスクを差し込み、左膝あたりに植物の実か花束を供えたのであろう。

その後、不定形の石11個で乱雑に下半身を覆い、最後に6枚の蓋石を架けて遺体の埋葬を完了したのである。

4 掘込石棺 H2 の出土遺物

掘込石棺 H2 を特徴づけ、その性格を明らかにする手がかりになる遺物は陶製マスク、260点にも及ぶ小さいガラス玉、そしてブロンズコインとそれらの出土状況である。

陶製マスクは、長さ23cm、幅17cm、肉厚は0.5cmを計る。顎に豊かな鬚を生やし、頭にも豊かな毛髪とともに捻じれた2本の角を持ち、両耳の上部は尖り、怖面の形相である。顔面には石灰質の土が付着し白く見えるが、その下に赤い部分が垣間みられることから、全面に赤い顔料が塗布されていることがわかる。裏面には顔料は塗布されていない。顔は人間、体は山羊である牧羊・森林・原野の守護神パン神の特徴を余すところなく示している¹⁾。



図6 掘込石棺 H2 出土陶製マスク（正面・側面・裏面）

1) レバノン考古総局調査官ナーデル・シクラウィ氏によると、ブルジュ・アル・シャマリ地区および周辺の遺跡では、ディオニソス、女性、幼児などのマスクが8点発見されている。Izumi Takura and Tsujimura Sumiyo: 2010で報告のラマリ TJ10 からはディオニソスのマスクが2面発見されている。

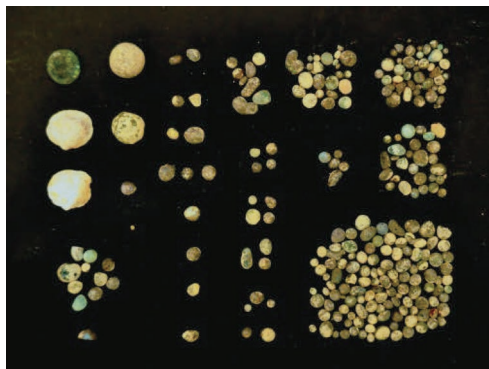


図7 掘込石棺 H2 出土のコイン・ガラス玉・貝殻等



図8 掘込石棺 H2 出土ガラス器破片とガラス玉2種
(上段：平面 下段：側面)



図9 掘込石棺 H2 出土ガラス玉 (大)



図10 掘込石棺 H2 出土貝殻 (上段：表面
下段：内面)

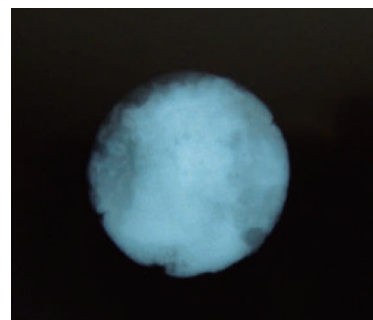


図11 掘込石棺 H2 出土コイン (左：皇帝または神の像 中：ティールの紋章と“TYR”銘 右：X線透過写真)

ギリシャ神話に登場するパン神はヘルメス神とニンフの息子で下半身は山羊，上半身は人間の姿，洞窟に住んで山谷をさまよい，狩猟し，音楽好きでシュリンクス（葦笛）を発明し我がもの顔に吹き鳴らしたという。人里離れた夜の寂しい森を通るときぞっとするような気味悪さ，恐ろしさを感じるのはパンの仕業と考えられたことからパニックということばも生まれたといわれている。また，Pan は汎（総て）を意味し，万有と自然の象徴とも考えられている。ローマ神話では森林・農産物・家畜の守護神であるファウヌスと同一視される。

被葬者の胸部・頭部に散布されたと思われる260個のガラス玉には装飾用ガラスとは異なる大きな特徴がある。直径2～15 mmの平面形が丸い240個のガラス玉は，底部が平らで上部は丸く膨らむ丸餅のような形である。長さ



図12 パン神（左：掘込石棺 H2 出土パン神 中：パールベック遺跡出土の青銅“PAN 神”（ベイルート国立博物館） 右：Pan 神とダフネ（イタリア・ナポリ考古学博物館））



図13 掘込石棺 H5 出土 金製イヤリングと歯

11～16 mm の平面形が楕円形または瓢箪形の細長い20個のガラス玉もまた底部が平らで上部は丸く膨らむ。細部を観察するとその多くのガラスは丸形ガラスが2個溶着したものであることがわかる。ガラス器の断片と思われるものも1点ある。

さてこれら260個のガラス玉の形態的特徴からは、溶けたガラスが平坦面に落ちて自然に冷却硬化したものと推測される²⁾。それは、ガラス器を製作する溶解炉の周辺に偶然飛び散ったものか、意図的に撒き散らして作られたものかは定かではない。また、色調の異なる2種類のガラスが熔着したものもある。これらガラス玉には穿孔はなく大きさもさまざま、形も丸餅形と瓢箪形があり装飾用とは思わず、その出土状態からは死者の弔いのために胸部と頭部に散布したものと解される。

なお、レバノン考古総局の許可を得て奈良大学において小さいガラス玉の蛍光X線分析を行った。当初、白い石灰質の土で覆われていたがクリーニングしたところ赤・青・緑・黄などの多彩な色ガラス玉であることが判明した。ガラス玉11点の蛍光X線分析を行った結果はすべてのガラス玉がソーダ石灰ガラスであることがわかった。

2) 同様の丸餅形のガラスを、調査メンバーの高橋健太郎がベイルート国立博物館に展示されていたのを見ている。しかし現在は見当たらない。ガラス研究家・島田守氏によれば、ガラス器製作時に飛び散ったガラスが炉の周辺や床に落ち冷え固まると丸餅形になるという。

青銅製コインは直径 23 mm, 厚さ 3 mm, 重さ 8.57 g を計る。表にはローマ皇帝か神の横顔像が、裏には“TYR”の文字が陽鑄されている。1 世紀末頃に鑄造されたものであり、掘込石棺 H2 の築造年代の上限を知ることのできる貴重な資料である。

なお、掘込石棺 H2 以外の石棺は既に盗掘されていたが、H1 の埋土中から炭化布片、H5 の埋土中からは金製のイヤリング 1 点と歯を 1 点発見した。H5 の歯は上顎の小白歯である。この歯は 11～12 歳で萌出するが、咬耗が認められないことから萌出後数年以内の 12～20 歳年齢で死亡した未成年の歯と考えられる。H5 の石棺の内法の長さが 135 cm と小型であることとも考え合わせると被葬者は 10 歳代前半であることが推定される。

5 掘込石棺 H2 の被葬者

掘込石棺 H2 の被葬者について遺構・遺物から考える。

前述したように石棺 H2 の特色はパン神のマスクと多量の不定形ガラス玉の出土である。マスクからは、パン神を守護神として牧羊を営む人物が思い起こされ、死してもなおパン神に守られたいとの強い思いが感ぜられる。

また、不定形のガラスは流通の製品ではなく工房のガラス溶解炉でのガラス製作作業に際してのみできるものであり、ガラス工房との関連も推測され興味のあるところである。棺内に花を捧げるとともに、ガラス玉を散華のように死者の上半身に振りかける行為も葬送のあり方として注目できる。ガラス製作技術の始源はまさしくここ東地中海のレバノン、シリアにあり、世界遺産ティール遺跡シティーサイト地区のメイン道路に面してガラス工房が発見されていることから、被葬者がガラス製作にも関係していたとも想像できる。

さて、掘込石棺 H1～H5 は、南北を主軸にして 5 基が並列して整然と築造され、ともに北側小口を碗形に掘り込み頭部側とするなどの共通点が多く、この 5 基が一家族の墓地として構築されていることが考えられる。

掘込石棺 H1～H5 と隣接する壁画地下墓 T. 01-I では、地下墓室内の床に 6 基の掘込石棺が造られている。地下墓 T. 01-I は壁画・碑文とモザイク床の碑文から、リューシスなる人物のために西暦 196/197 年に築造されたことが明らかであるが、この 6 基の掘込石棺に埋葬された人々も一家族であろうと考えられよう。

2011 年の調査では、地下墓 T. 01-I の南東側に地下墓 T. 01-II の存在が確認された。いまだ階段下部と墓室入口のみの調査であるが、その主軸は掘込石棺 H1～H5 の主軸と同じ方向である。また、T. 01-I の墓室に降る階段東壁と墓室南壁東側は T. 01-II の墓室北西側を破壊して構築されていることがわかっていて、T. 01-II は T. 01-I より古く構築された地下墓であり、掘込石棺 H1～H5 と同時期である可能性も示唆される。

これら地下墓と地表の掘込石棺はともに同じ墓域に築造されている。しかし、盗掘されていてもなお遺物が多く残存し、四面の壁と天井に鮮やかな壁画が描かれ、床もモザイクで飾られていた地下墓 T. 01-I と掘込石棺には、大きな経済的、社会的立場の格差がみられる。ブルジュ・アル・シャマリ集落の領主的な家族が地下墓に、領主の下で羊を育て、ガラス工房とも関係していた家族が地表の掘込石棺墓にそれぞれ埋葬されたのであろう。

フェニキアの都市・ティールはギリシャの占領、続くローマの占領のなかにも特徴ある文化を保持し続けた。ローマ時代 1～2 世紀のティール市街はローマンバス、ヒッポドロムス（戦車競技場）、水道橋、列柱道路、ネクロポリスなどすっかりローマ化した様相を見せる一方で、ティール郊外にあたるブルジュ・アル・シャマリ T. 01 遺跡はこの地の独自性を保持する。近隣の地下墓が正方形の墓室とその周壁に多くの納体室をもつのは異なり、T. 01 地下墓の構造が横長プランと床の岩盤掘込石棺の形をとり、また、ごく小規模の地表岩盤掘込石棺 H2 にマ

スクとガラス玉260個が副葬されるなど、葬送形態や儀礼、副葬品に独自性を垣間見るように思われる。

本稿は日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究（A）海外の助成（2010～2013年）を得て行った研究の成果の一部である。掘込石棺 H2 の現地調査は2010年に行い、参加者は以下の通りである。

西山要一（研究代表者・奈良大学教授）

保存科学研究班

小林有紀子（文化財修復家）・高橋健太郎・板垣泰之・高橋美鈴（奈良大学大学院）・大橋彩香（奈良大学文学部）

考古学研究班

松田正昭（考古学者）・小原雄也（奈良大学大学院）

特別研究班

片山一道（京都大学名誉教授）・鈴木孝仁（奈良女子大学大学院教授）

本村沙織（奈良女子大学大学院）、パトリツィア・ロ・サルド（イタリア・壁画修復学）・塩地宏行・山内元樹（(株)文化財サービス）

レバノン研究班

ガビー・マアマリー（パラマダ大学教授）、ハッサン・バダウィ（レバノン大学・准教授）

カウンターパートナー

アッサド・セイフ（レバノン考古総局次長）、アリ・バダウィ、ナーデル・シクラウィ（レバノン考古総局調査官）

参考文献

Ali, Khalil Badawi

2010 Tyre

泉拓良

2004 レバノン・ティール遺跡での縦穴墓・地下墓の発掘調査（科研報告書）

泉拓良・西山要一・辻村純代・宮坂朋

2004 レバノン共和国ティール遺跡の学術調査2003, 今よみがえる古代オリエント 第11回西アジア発掘調査報告会報告集, 日本西アジア考古学会

Izumi T. and Tsujimura S.

2010 PREMININARY PORT OF ARCHAEOLOGICAL INVESTIGATIONSIN TYRE 2010, Japan Archaeological Expedition for Lebanon

Jidejian, N.

1966 Tyre through the ages. Librairie Orientale, Beirut, Lebanon.

西山要一

2006 レバノン共和国・ティール市郊外 ラマリ地区所在地下墓 TJ04 保存修復研究 2004・2005年度概要報告, 文化財学報 第23・24集, 奈良大学文学部文化財学科

2007a レバノン共和国ティール市郊外ラマリ地区所在ローマ時代地下墓 TJ04 保存修復研究 2006年度概要報告書, 奈良大学

2007b レバノン共和国ティール市郊外ラマリ地区所在地下墓 TJ04 保存修復研究 2007年夏季概要報告, 奈良大学

2008a レバノン共和国・ティール市郊外ラマリ地区所在地下墓 TJ04 保存修復研究 2007b 概要報告（ローマ時代壁画地下墓の保存修復）, 奈良大学

2008b レバノン共和国壁画地下墓の修復, 奈良大学博物館

2009 レバノン共和国壁画地下墓の修復—ブルジュ・アル・シャマリ所在ローマ時代壁画地下墓 T.01 2009年度概要報告

2010a レバノン共和国壁画地下墓の修復—ブルジュ・アル・シャマリ所在ローマ時代壁画地下墓 T.01 保存修復 2010年度概要報告書, 奈良大学

2010b 西暦196/197年銘の壁画地下墓を調査する—レバノン共和国壁画地下墓の修復・2009年度一, 平成21年度 考古学が語る古代オリエント 第17回西アジア発掘調査報告集

2011a レバノン共和国壁画地下墓の修復—ブルジュ・アル・シャマリ所在ローマ時代壁画地下墓 T.01 2011年度概要報告

2012 レバノン共和国ティール市郊外 ローマ時代壁画地下墓の修復研究—ブルジュ・アル・シャマリ T.01 遺跡 2009-2011

年度研究報告, (2012年11月19日開催のレバノン研究会資料)

西山要一, 片山一道, 鈴木孝仁, パトリツィア・ロ・サルド, ハッサン・バダウイ, ガビイ・マアマリ, ナーデル・シクラウイ
2011b 墓主リューススの肖像壁画と Pan 神のマスクーレバノン共和国プルジュ・アル・シャマリ地区地下墓の修復・2010
年度, 平成22年度 考古学が語る古代オリエント 第18回西アジア発掘調査報告集